

## 児童健全育成賞（数納賞）佳 作

# 思い通りにならない体験から自己解決力を育むための環境構成 —防災段ボールキャンプを通じ、児童館・児童厚生員の役割を考える—

兵庫県神戸市  
神戸市立六甲道児童館 館長 金 坂 尚 人

### 『大震災』

わたしたちは、大震災を知らない。  
わたしたちは、震災後の生活を知らない。  
わたしたちは、震災で苦勞した人たちを知らない。  
わたしたちは、安全な日常しか知らない。  
わたしたちは、ぜいたくしか知らない。  
わたしたちは、温かい家しか知らない。  
わたしたちは、おいしいごはんしか知らない。  
だからそれではいけない。  
大震災で亡くなった人たちを考えよう。  
大震災で大変だった人たちを考えよう。  
大震災への意識を変えよう。  
大震災にあったらすけられる人になろう。  
わたしたちの町が助けられたように。

(神戸市立成徳小学校6年生児童が自作し  
2019年震災集会で朗読した詩)

## 1. はじめに

人は現在の状況から何か欠けた時に初めて、「幸せ」に気づき「当たり前」と思っていたことを「有難い」と感じることができる。平成26年より神戸市立六甲道児童館で実施している「防災段ボールキャンプ」は子どもたちが自分が一晩寝る場所をダンボールでつくり、そこで翌朝まで過ごすプログラムである。

現代社会は、技術の進歩により自分の思い通りにできることが多くなっている。スイッチ一つでお風呂が沸き、ご飯が炊ける。自分が欲した情報だけ検索し、ネットで注文したものは翌

日には届く。そんな環境の中で子ども達は何でもすぐに手に入りやすく、困ったことも頼めばすぐに大人がやってくれる環境で過ごしている。しかしながら大人が全てを準備し、子どもたちが受け身になって「成功させられている」ことは、子ども自身の成長の機会を奪っているともいえる。また「あたりまえ」と誤解した通常時の「幸せ」は脆く、大人も子どもも、「想定外に弱い」ともいえる。この想定外と一番向き合わないといけないのが「災害時」である。本事業は、たった一晩の時間ではあるが、子どもの要望や困難に大人が対処するのではなく、自分で解決できるような環境をつくることで、子どもたちの想定になかった「どうしよう」「こまった」といった課題が発生し、自分で考え、どのように自己解決するかが求められる。課題解決のために子どもたちは自ら工夫し、周りの友達と協力することで課題解決を目指すようになる。

地域における課題が多様化する中で、児童館が地域から期待される役割も大きくなっている。本稿では、平成26年度からの防災段ボールキャンプの実践を通じて、児童館の環境構成のありかた、児童厚生員の役割を考えたい。

## 2. 阪神淡路大震災

神戸市立六甲道児童館が立地する神戸市灘区中心部は阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた場所の一つである。隣接するJR六甲道駅は

1階部分が押しつぶされ、複合ビルの4階に位置する児童館では天井部分が全て崩落、翌年の4月まで休館を余儀なくされた。

震災から約25年が経過し、神戸の街は一見して美しく、震災の面影は町の一部に残るモニュメントや石碑のみである。同地域の小学6年生が総合学習の中で自発的に在校生の保護者に対し取り組んだアンケートでは1000人弱の在校生の保護者の内、約半数は阪神大震災を経験していないとの結果であった。

当地域において、防災イベントなど震災を思い起こす事業を実施するためには、課題が大きかった。地域の方々の多くは被災者であり、何年たっても当事者にとって震災が終わることはない。普段の生活の中で見えることはないが、大切な人を失った悲しみを抱えている人、金銭的負担を現在も強いられている人は多い。日頃児童館の運営に協力していただいている方の中には、「隣人の家が倒壊し下敷きになっていた、助けてと言われたのに、迫る火の手に、助けられなかった・・・」と涙ながらに話をしてくれた方もいた。そして私自身が阪神大震災時に神戸にいなかったため、「実際にいなかった自分が震災に触れることはタブーだ」との思いが何かしらの事業実施を躊躇させていた。

2011年3月11日、東日本大震災が発生。繰り返される報道に、震災時の辛い思いがフラッシュバックする人も多かった。その中で、地域住民から阪神大震災の記憶や普段の意識が薄れていくことに危機感を感じることに、今だからこそ、今後どのように地域の子も達や保護者に震災や災害時の意識を継承していくかを考えないといけないという声があがった。被災していない自分が事業を実施することに関しては、「経験した人であっても、他の人の苦しさや、悲しみを理解することなんかできない。あなたはあなたができることをやりなさい。」と様々な人が背中を押してくれた。

はじめて計画した、阪神大震災の地域の様子を知るために、被災当時の写真をもとに、現在の方がどのように変化しているかを探しに行く

プログラムでは、地域の「知ってもらいたい」という思いが大きすぎ、プログラム自体に子どもが主体的にかかわる要素がなく、教えられる一方だったこと、震災前の町を知らない子どもたちは興味を持つことが難しかったこともあり、参加者が集まらなかった。そこで、地域の方の「伝えたい」という思いに、改めて、児童館ならではの伝え方の方法「遊びの要素」を加え、子どもたちが自発的に参加し、楽しみながら学びにつながる内容を皆で再検討した。そして、様々な年齢が混ざり合うことで、子どもたちが遊びを通じて学びを広めている児童館だからできる防災体験プログラム「防災段ボールキャンプ」がスタートした。

### 3. 持ち物は自分で考える (プログラムの特色)

防災段ボールキャンプでは、参加者に持ち物の指定をせず「各自必要と思ったものをリュックにまとめて持ってくる」とした。本来避難を想定した時に必要なものは各家庭によって異なっており、当然であり、家族で持ち物を話し合ってもらい機会をつくってもらいたいと考えたためである。児童館は準備物として・段ボール・ガムテープ（紙製）・新聞紙・カンパン・水のみを準備することを伝える。

これは、六甲道児童館の運営母体である特定非営利活動法人S-spaceの考え方で、普段の遠足や野外活動事業などで、必ず持ち物に「その他自分の必要と思ったもの」という言葉が入る。指示された持ち物を準備するのではなく、その状況に応じて他に何が必要かを常に考え、自分の責任において準備することが必要だと考えているからである。このアプローチに、一番困惑をするのは保護者である。学校やその他の団体の事業でも、持ち物に関しては細かい指示が入る。具体的な指示がなく「自分で持ち物を考える」経験が保護者自身に少ない上、わが子に失敗をしてほしくない、恥をかかせたくないという思いが不安につながる。問い合わせがあった保護者に対しては、自分自身で考え工夫する力

を引き出すことがねらいであること、実際のキャンプより、事前事後の家族の話し合いこそ、一番の学びの場であること、持ち物に正解はなく、足りない時こそ学びが多いことを伝える。児童館は学校などに比べて保護者にアプローチしやすい。防災プログラムを子どもだけの事業にとどめず、家族にとっても「我が事」として感じることができる工夫をし、家族単位で防災に対する意識を高めてもらうことが大切である。

#### 4. 事業概要

○実施場所：成徳地域福祉センター（児童館が商業ビルに在在しており実施が難しく、地域内で災害時に防災の拠点となる「地域福祉センター」に趣旨を説明し協力を得て実施）

○対象：小学1年から6年生約20名  
施設利用定員数の兼ね合いから、事前申し込み制小学生20名とした。多くの実施年度で多数の応募があり抽選での実施となったことで、普段の関係性に関わらず様々な児童が参加しキャンプを通じて同じ時間を過ごすことで、普段関わらない子ども同士であっても、小学校・年齢・性別をこえて自然と関わりがうまれコミュニケーションが求められる環境が構成される。

○事業実施形態：子育てコミュニティ育成事業  
神戸市立の児童館において、地域と児童館が連携・協力の上で実施している事業。日曜日など、児童館を開館していない時間帯に開館・イベント実施するために、地域の自治会・民生主任児童委員・学校PTAなど地域の有志で組織される。これにより地域の方が主体的にボランティアスタッフとして参画し、震災の体験や思いを地域内に共有する当初の目的にも沿う形となった。

○目的：震災を知らない子ども達・家庭に対し、段ボールを使った寝床づくりという遊び体験、避難体験を通じ、考えて工夫し、協力することで課題解決の力を引き出し、自分で事前に非常時をイメージすることで防災に対する意識の向上を目指し、学びにつなげる。

#### ○事業実施日

平成26年11月29日(土) 18:00～翌日7:30  
平成27年9月26日(土) 18:00～翌日7:30  
平成28年9月24日(土) 18:00～翌日7:30  
平成29年9月30日(土) 17:30～翌日7:30  
平成30年は台風接近のため、泊まりなし。事前プログラムのみ実施

令和元年10月5日(土) 18:00～翌日7:30  
※夕食・朝食・入浴はなし。トイレは通常通り使用可能とした。

#### ○タイムスケジュール（プログラム）

当日までに	家族（子どもだけでも可）で荷物を考え準備しておく
18:00	集合・挨拶・導入（防災に関する簡単な質問を行う）
18:05	①もってきたものなあに？（持ち物の紹介）
18:20	②親子防災体験プログラム ※終了後保護者帰宅
18:50	③子ども達自身によるグループ分け
19:00	④段ボールハウス作り（グループごと）
21:00	⑤消灯
	⑥夜更かしタイム
6:00	⑦起床
	⑧非常食の準備・段ボール等片付け
	⑨朝のプログラム（アルファ化米試食）※
7:00	⑩保護者集合・フィードバック（終了後7:30頃解散）
・家族で話し合いし持ち物追加（後日アンケート記入の上提出） ※水・乾パン・アルファ化米などは行政の備蓄入れ替え品を使用	

#### 5. プログラム詳細エピソード

##### ①「もってきたものなあに？（持ち物の紹介）」

最初に行うプログラムは、お互いの持ってきた荷物の紹介である。自分の前に持ちものを並べ、おすすめするアイテムを理由と共に紹介しあう。ここでのポイントは持ち物の開示を強要しないこと、事前に必ず「見せたくないものは無理に出さずリュックの中に入れてたままでもいい」ことを伝える。参加者の中には、持ち物紹介の時には出さなかったが、安心して眠る為の「ぬいぐるみ」を持ってきている参加者や、津

波を想定し子どもなりに考え「浮き輪」を持ってきている参加者もあった。参加前に家族で何が必要か話し合い、不足する物を買物に行った参加者も多かったが、あえて、子どものみで持ち物を考え、持っていくものに保護者が介入していない家族もあった。安心して過ごすためのぬいぐるみの持ち込みは、指示する物ではなく、自分で考え必要と判断した結果である。持ち物に正解不正解はなく、自分が必要だと思えば必要であり、必要な物は個々に異なる。ゲーム機の持ち込みに対しては特に大人側に心理的抵抗はあるが、遊び道具などの自分の時間を過ごすものは、忘れがちではあるが実際に避難する際には必ず考えておかなければならない。

## ②親子防災プログラム

はじめに保護者を含む参加者に向けて、防災に対するいくつかの質問を行ったあと、保護者も非常時について考えるきっかけとなるよう、親子防災プログラムを行う。各年の実施プログラムは以下の通り。

- 防災ダック（災害時の初期動作を表す防災ゲーム）
- どう変わった？六甲道周辺（周辺地域の震災時と現在を見比べる）
- 作ってみよう防災グッズ（新聞紙で作る自分用スリッパづくり）
- 親子防災バッククッキング体験（材料と調味料を耐熱ポリ袋に入れ、沸騰したお湯にいれ真空調理して、非常時でのカレー作りを体験する。）
- 親子で作るパーソナルカード（免許型のパーソナルカードに、親子で会話をしながら、家族の集合場所や非常時の連絡先、血液型やアレルギーの有無などを記入した。）
- トイレが使えない！！？そのときどうする？（トイレが使えない想定で、身の回りにあるものを使った吸水実験。）

阪神大震災を伝えること、非常時のために事前に準備すること、今あるものを工夫して代用する力を引き出すことをテーマに加えながら、親子防災プログラムを実施している。

## ③子ども達自身によるグループ分け

親子プログラムが終わった時点で、参加者の保護者は全員帰宅してもらう。これは大人が同じ場所にいることで子どもたちの学びのチャンスが損なわれることを防ぐためである。（保護者には児童館のSNS配信を利用して子ども達の様子を知ってもらう）グループ分けの前に子ども達に伝えることは

- ・自分たちだけで話し合って決めること
- ・グループ数、グループの人数に制限はない（一人でもよい）
- ・クラフトテープ（紙製のガムテープ）は1グループに1本渡す
- ・参加者一人一人が心から納得できるように考える。

最初子ども達は、自分のことしか考えずグループを作る。その中で、周りに目を向ける一言をスタッフが伝えることで、他の小学校などから一人で心細く参加している人のことなど、周りの人の状況や思いに気づく。大人が子どもを信じ任せることで、時間はかかるが、様々な参加者に配慮しながら、自分たちで話し合いグループ分けを行う。

ある年は他の小学校から参加した1年生が、「一緒にいれて」と言えず「自分一人でもいい」と作り始めた。その中でずっとその様子を見て気にしていた高学年グループが、自発的にその子の様子を見て声をかけ、一緒に合流する姿も見られた。はじめから自分一人で挑戦してみたいと思って参加していた児童に対しては、「困ったことあったら手伝うから言ってね」「途中で寂しくなったらこっちのグループに入ってもいいよ」など、本人の意思を尊重しつつ、周りの子が気遣う声掛けも見られた。

## ④段ボールハウス作り（グループごと）

実際に段ボールハウスを作り始めると、毎年数人の児童が開始直後に職員の所に来て「はさみかして」と言いにくる。その際改めて、こちらで準備しているのは「段ボール・新聞紙・ガムテープ」だけということ伝えると、そこで初めて趣旨を理解する児童もいる。

『はさみを〇〇ちゃんが持っていたので、借りにいこう』

『そもそもハサミ使わなくてもちぎればいいんじゃない』

「スプーン持ってるから、これで点線みたいに穴をあけて切り取ろう」

そこで初めて自分で考えるスイッチが入り、現状の課題に対し、周りの子ども達とコミュニケーションをとりながら、手元にあるものを使ってどのように工夫し対処するかを求められる。準備を大人がしすぎず、不自由な状況をあえて作り出すことで工夫がうまれる。

### ⑤⑥就寝・夜更かしタイム

段ボールキャンプでは消灯の時間を9:00とし、すべての電気を消すが、その時間に寝ることを強要はしない。作業を進めてもいいし、友達と気のすむまま話をしてもいい、ルールは1つだけ、他の人にとってどうかを考えるだけである。当然、自分としては声の大きさを控えていたり、ライトをまぶしくしないように配慮しているつもりでも、他の子にとってはうるさかったり、まぶしかったりする。多くの子どもたちがスタッフのところに、「うるさくてねられない」「まぶしい」などの苦情を言いに来るが、原因のある相手には伝えてはいない。よって、スタッフ自身も子どもたちが自分自身で解決できるように促すだけにとどまり、大人からの声掛けはしない。その結果、涙をためながら自分が我慢するという選択もする子もいるし、勇気を振り絞って話をしに行く子もいる。周りからうるさいとずっと言われていた児童は、いざ自分が眠くなった際に、「まわりがうるさくてねむれない」と伝えてきた。自分がその立場に立たないと相手の思いはわからなかったのだ。普段の子どもたちの活動時には、子ども自身の感情をそばにいる大人が先読みし相手に伝えてしまうため、現代の子ども達は著しく自分の言葉で伝える能力が低く、相手の表情からその感情をくみ取ることも苦手である。子どもたちにとって夜の時間は、相手の立場に立つ体験と共に、自分の言葉で自分の思いをどのように相手に伝

えるかという学びの時間となっている。

### ・考え・工夫する環境が学びにつながる

段ボールハウスを作る子ども達の傾向として、横の人との間仕切りは作るが、あまり床には何も工夫をしない。その結果いつもの環境との違いから寝られない子も多い。また、床の冷たさが体に伝わり、寝始めたころは大丈夫でも、明け方には寒くなり、丸まっている子も多い。

今までに数名ではあるが抽選の結果、経験者が参加できたことがあった。この場合、一度この段ボールキャンプでの寝泊まりを経験したからこそ学びにつながっていることも多く、床で寝ることが痛かったことを踏まえて、2年目は床を重点的に作成したり、窓際は明け方に寒かったので窓から離れて寝る場所を確保する等、持ち物の再考や学びをほかの参加者に共有する姿も見られた。

また一見便利に思っているものでも避難環境によっては適さないケースもある。非常災害用エマージェンシーシート（銀色の簡易毛布）は暖かいが、少し動いただけでもカシャカシャし音がうるさく眠れないこと、ハンドルで充電できるタイプの懐中電灯も寝ている人が多い時間帯に使うことは、ハンドルをまわす際の音がうるさく迷惑となる為使えなかった等、実際にその場で使ってみて初めてわかることも多くあった。

令和元年度の段ボールキャンプでは、全員の持ち物に「缶詰」を一つ持ってくるようにと加えた。その年の18名の参加者が持ってきた缶詰は全てプルオープン対応であったが、キャンプ前に自分の力のみで缶詰を開けたことがあったのは4名のみ。当日初めて自分で開けたのは9名（6年生1名を含む）。ここで注目されるのは「他の人に開けてもらった」残りの5人である。普段はしゃべらない高学年同士の女子が男子児童に「缶詰あけてくれる？」と頼みに行ったのだ。中には缶詰のプルタブ（持ち手）を動かすすぎて取れてしまい途方に暮れる児童もいたが、周りの児童と共にその状態からどのように開けるかを皆で話し合い、考えて解決する姿

も見られた。事業を通じて缶詰だけでなく、ペットボトルのキャップも自分で開けられない。開けたことがない。缶切りの使い方やナイフの持ち方も知らない児童がたくさんいることも分かった。大人にいうと何でもやってくれる、何でも準備してくれる今まで当たり前だった環境から、自分の力だけで解決できない事例が生じた時にまわりとともに工夫・協力し解決するプロセスが自然発生する。この事業では大人は極力手助けしないが、子ども同士の協力を禁止しているわけではない。発生した課題に関して、自分の力では解決できなくても、周りの協力によって解決できた事例が多くあった。これは子どもたち自身にとっても大きな経験であろう。

#### ⑦起床 ～ ⑩解散

朝6:00起床。例年、寒さや床の硬さ、いつもと違う環境などの要因により十分な睡眠をとることができなかった児童も少なくない。自分の荷物をまとめ、グループごとに使用したダンボールを片付ける。集まった段ボールは廃品回収に回す。その間に、水で約60分、お湯で約15分かけて作った2種類のアルファ化米(非常食)を準備しておき、終了後に集まった保護者と共に試食し、温かい食べ物のありがたさを知る。その際、マッチやライターを持ち物で持ってきていた人の例を挙げて、一人一人の持ち物であっても、火は誰か一人がいれば分け合うことができる事例などをあげ、協力して皆でカバーしあう必要性を伝え、今回の事業の振り返りを行う。迎えに来た保護者には、個々の参加児童の様子や、成長・学びにつながった点、十分な休息をとることを伝える。

- ・事業をより良いものにするために自由と制限のバランスを再考する

荷物の制限をしなかった結果、初年度などは多くの子どもたちが、リュックと両手いっぱい荷物を抱え参加した。荷物の選定に十分な考察がなされておらず、無駄に荷物が多くなっただけの状態も見受けられた。そのため現在は、荷物はリュック1つにまとめられるだけ。食べ物は缶詰一個などと多少の制限をかけている。

自分で考えることができるように自由にする点と、子どもたちにとって最大の学びにつながる最低限の縛り。毎年このバランスに苦慮し、計画の際に地域住民と模索しながら調整を重ねている。

- ・終了後(家族で振り返る時間をもつ)

事業実施後自宅に帰って話し合いの時間をもち、振り返って何が必要だったかを考え、荷物に追加して家庭用の非常持ち出し袋にしてもらおう。参加してどのように感じたか、子ども・親の意識の変化等アンケートの記入提出を保護者に依頼し、次年度の改善点に活かしていく。

#### ○事後アンケートより

- ・震災時は学生で守られていた、今は私が守る立場。イベントを通じ子どもが意識する姿を見て、私自身の意識も変わりました。【親】
- ・家族で防災について話し合うよいきっかけになった。【親】
- ・災害時の集合場所を決めていたが、詳細の目印まで決めておらず認識のずれが判明し改善できた。【親】
- ・道具を考えて持っていったものの使い方がわからない物が多く使えなかった。(ナイフ・缶切り等)【参加児童】
- ・友達・家族が一緒のほうが心強さみしくない。【参加児童】
- ・お布団ってあったかい【参加児童】他

子ども達は、「当たり前」だった準備された環境・手伝ってくれる環境から離れ、いままで意識していなかったことを「有難い」と感じていた。

## 6. 工夫する余地をあえて残す環境構成の必要性

本事業を実施する中で、普段の児童館の事業における環境構成のあり方や、子どもたちへの児童厚生員のアプローチを見直す機会となった。「知っている(知識)」「やったことがある(体験)」が重要視されるが、もっと大切なことは、課題解決の為にそれらのことを組み合わせ、「応用する力」である。子ども自身が今おかれ

ている状況において「悩み・考え・工夫する」ことで知識や体験が連結し、『知恵』『経験』となる。

児童館が実施する事業や普段の遊び環境においても、完全に準備をして成功できるようにお膳立てするのではなく、意図的に不完全な環境構成を施し、そこに子ども達が工夫できる余地を残す。その工夫の余地は子どもたちの「おもしろさ」につながり「しなければならない」から遊びの本質である「やりたい」という自発的なものになってしまう。

## 7. 失敗体験を肯定的にとらえる

子どもたちが過度に失敗を恐れ、成功にこだわる原因は、子どもたちに関わる大人が成功に執着していることにある。大人は子どもに「できた」「知っている」ことを求め、子どもが失敗しそうなどときにはカバーして成功させる。その結果、子どもたちは経験や知識のあり方を誤認し、成功させられた体験をまるで自分だけで勝ち取ったかのように錯覚する。今は成長途中であり現段階ではできないこともあること、次はできるかもしれないこと、一人ではできなくても他の人と協力することで可能になることを知り、不完全な自分を認めて、それでも自分は大切な存在と自分自身で思えることが大切ではないだろうか。そのためには、子どもも大人も、失敗体験を「こうするとうまくいかないという発見体験」と肯定的にとらえ、大人が違う視点からのメリット・成長につながった点を伝える（リフレーミングする）ことで、子どもたちは、成功か失敗かだけではない、様々な指標の存在に気づくことができる。それは思い通りにならなかった際の精神的なレジリエンス（回復力）にもつながる。本稿で紹介した防災段ボールキャンプだけでなく、普段の児童館での活動においても、子どもたちは異年齢で関わる日々の中で、思いと思いのぶつかり合いや、すれ違いもある。チャレンジしてもできないこともあるだろう。子どもたちは活動を自己選択し遊びを行う児童館で、思い通りにならないことを毎日のように

繰り返す。それに対する児童厚生員の役割は「リフレーミング」して失敗を発見体験に置き換えて言語化すること、成功・失敗ではない違う指標での価値を子どもたちやその子の保護者に伝えることである。周りの大人から繰り返し様々な結果以外の指標を伝えてもらうことで、子ども達は成長する過程でストレスに耐性をもち、上手いかないことをリフレーミングし、ほかの価値を見出して次につながるアプローチを探し出す。失敗しても大丈夫という環境を保証すると、子どもたちは失敗を恐れず伸び伸びと今の課題にチャレンジすることができる。児童館は遊びを通じた健全育成の場所だからこそ、「安心してうまくいかない経験をできる場所」であることが大切である。

## 8. 地域防災プログラムに児童館（児童厚生員）が関わる意義

「あそび」は誰かによって与えられるものではなく、自発的に興味を持って面白いと感じ、自ら取り組むものである。子どもたちにとっての学びも、「おもしろい」と感じることであれば、いつの間にか「あそび」となり、やらなければならない（have to）がやりたい（want to）に変化すると継続しても苦にはならない。

毎年、日本各地で甚大な災害被害が発生している。これからの子どもたちに必要な力は、工夫し対応する力。協力して解決する力。そして、できない自分を認める力、うまくいかなかったときにリフレーミングして新しいアプローチを探そうとする力である。地域において防災プログラムが実施され、非常時の対応を事前に少しでもイメージしておくことで、避難の迅速化やいざという時に被害を出さない力につながる。児童館が独自に防災プログラムを主催実施するだけでなく、積極的にアウトリーチして地域や学校と連携することで、児童厚生員の専門とする遊びを通じたアプローチにより「遊び」と「学び」が繋がり、子どもたちが防災に興味を持ちやすくすることができる。また、児童館が持っている異年齢での活動要素と地域福祉の様々

なネットワークなどが加わることで、子どもたちだけでなく保護者を含めた地域全体での防災の意識向上につながる。

児童館は、遊びを通じた健全育成のアプローチを長年実践してきた専門機関である。今後、様々な地域において児童館（児童厚生員）の専門性が防災プログラムや地域課題のアプローチに加わることで、学校や様々な施設のプログラムが「あそび」と繋がり、より子どもたち・保護者に伝わりやすいプログラムとなって実施されることを期待する。